

手紙



文小原麻由美
絵 小島加奈子

森の奥にある古いお寺には、緑色のポストがあります。緑色のポストは、亡くなった人へ宛てた手紙を投函するポストでした。

拝啓 残暑厳しき折 どうか元気でいてくれるようにと願いを込めてこの手紙を書いています。

こんな書き出しで始まる、長い長い手紙が向日葵さんの元へ届いたのは、立秋の日の朝でした。お寺の住職が、「緑色のポストの中に、あなた宛ての手紙を見つけてきました。どうやらあの世とこの世が混在してしまっただようです」と、持ってきてくれたのです。

向日葵さんは便箋を丁寧に広げながら、テラスの白い椅子に座りました。薄青色の

大輪のアサガオがいくつも花を咲かせ、ツルは空に向かってグングン伸びています。

向日葵、僕は今どこにいるのかわかりません。わかってるのは、ここはこの世ではなくあれからすでに三年の月日が経ってしまったということです。僕はあの日不慮の事故で、突然きみの前から姿を消すことになってしまいました。そして、あの世へ行くための列車にも乗る勇気が持てず、今もこうしてさまよっています。さまよっているから、一年に一度のお盆にもきみに会いに行くことができません。

きとききは、看護師の仕事を生懸命やりながら、持ち前の明るさと優しさで患者さんに寄り添っているんだろうなあ？と、きみに会いたい僕と、もう僕のことなど忘れて誰か好きな人ができてしまったかもしれない……そんなきみに会いたくない僕がここにいます。

向日葵……きみとの出会いは高校の弓道部だったね。いつも部のムードメーカーでマドンナの存在のきみだったから、僕が心を伝えるスキなんて全然なかった。

何も言えないまま高校を卒業して、僕は大学を出て企業のサラリーマンに。きみのごとは風の噂に聞いていたよ。看護師学校から近隣の病院の看護師になったって。びっくりしたよ。あの再会には。「新藤さん、新藤啓太さん」って聞き覚えのある

声が出たんだ。風邪をひいてかかった病院がきみの勤める病院だったなんてね。それから、ときどき飯を食べに行くようになったんだけど、僕が告白できずにいると、「啓ちゃん、変わってないね。その優柔不断なところ。私がいけないとダメかもね」ときみから告白してくれたんだよね。

数年付き合って、六月にささやかな結婚式をあげたね。ジュニアフライドたなんて、西洋の言い伝えて日本には関係ないんだよって話しても、きみは全く譲らずほったを膨らませて怒るんだもの。でも、そんな顔も可愛かった。二人であちこち旅行に行ったよね。ある

夏、高原へ旅したときに小さなガラス細工の店を見つけて、風鈴を作ったよね。絵が得意なきみは、一緒に見た花火の絵を描いてくれた。軒下に吊り下げて、風が吹くと『チリンチリン』って、涼やかな音がしたっけ。

そう……僕にはもう、こんな思い出話しかできない。未来がないんだから。三年経ってやっと、それじゃダメだってわかったんだ。今年こそはあの世行きの列車に乗るよ。きみのそばには別の男性がいるかもしれない。辛いけど、それでも遠くから見守ろうって、決めたんだ。

八月十三日の朝。僕は風になってきみに会いに行くから。 敬具 新藤啓太 向日葵さま

手紙を読み終えた向日葵さんは、静かに目を伏せて微笑みました。

「まだあの世にいていないってことは、私からの手紙は啓ちゃんに一通も届いていなかったってことね。まったく……今までのポストに何通出したかと思ってるのよ」向日葵さんはふっと溜息をついて、目じりにしわを寄せました。そして、「太一、こっちへおいで」と、庭で遊ぶ小さな男の子を抱き寄せました。

「あれからずっと鳴らなかったけど、『チリンチリン』って、パパが鳴らしてくれるよ」

向日葵さんは軒下に吊り下げられた花火模様の風鈴を、静かに見つめました。

（終わり）
次回回は9月●日掲載

